

和紙

だより

目次

越前和紙への提言 大柳久栄さん	1
イベントレポート 金唐紙 展覧会	2
渡き場探訪 山喜製紙所	3
情報欄 イベント情報、お知らせ	4

越前和紙への提言



■大柳久栄(おおやなぎ ひさえ)
 料紙研究家。1939年群馬県高崎市生まれ、女子美術大学芸術学部卒。服部時計店(現セイコー社)にて工業デザイナーとしてウォッチのデザイン等を担当。退社後、1977年より、日本画家、河鍋暁斎の研究と下絵の修復、書写用料紙制作、建築空間のための創作、本の装丁・装画、打ち紙の研究のかたわら、継ぎ紙を中心にカルチャーセンター講師、講演、執筆を通じて和紙の伝承にも幅広く活躍。文溪堂工房主宰、河鍋暁斎記念美術館理事、元女子美術大学講師、文化財保存修復学会会員、ジャポニズム学会会員。

■大柳久栄さん(料紙研究家)
 「本物が訴える品格を見分ける眼を」

●河鍋暁斎との出会い

私の嫁いだ家が大伝馬町の「文溪堂丁子屋平兵衛」と申しまして、江戸末期に『南総里見八犬伝』などを手掛けた版元でした。家は日本画家の河鍋暁斎と親しくおつき合っていたそう、姑は、暁斎の娘・暁翠さんにもとても可愛がられました。昭和五二年、河鍋暁斎記念美術館(以下記念館)が出来ると聞き、姑と開館日を待つて駆け付けました。当時、私は暁斎を知らなかったのですが、彼の卓越したデザイン力にビックリしてしまいました。

暁斎は国内より海外の方がずっと有名で、彼の作品を収蔵していないと美術館としては箔が付かないくらいで、同じ「斎」の付く葛飾北斎に次ぐ絵師として人気が高いのです。明治二十二年になくなった時には、ヨーロッパの新聞社十社が報道したそうです。暁斎は鹿鳴館を設計したお雇い外国人の建築家ジョサイア・コンドルに日本画を教え、後年コンドルはそれを本にまとめ、本国で出版しました。それは近年日本語に訳されています。(「河鍋暁斎」岩波文庫)。

記念館の館長は暁斎のひ孫に当たる河鍋楠美さんとおっしゃる女医さんで、私財を投じて美術館を開館し運営している方です。「これから沢山の絵画稿を修復して保存しなくては」とおっしゃいました。幕末から明治の画家ですから、和紙に墨で描きます。修正する時は消しゴムを用いるわけにはいきませんから、紙片を上張りしていて、時間が経つにつれ糊の性が尽きて剥がれ出してしまい、下絵は箱の中に詰め



河鍋暁斎の修復下絵

込まれてぐしゃぐしゃになっていました。私はこれらの下絵を修復して暁斎のデッサンを見たい気持ちに駆られました。修復するからには失敗は許されませんから、経師の技術の手ほどきを受ける傍ら、東京文化財研究所の増田勝彦先生に相談に乗って頂き進めました。使用する紙は産地を回り探しました。

私の修復した下絵は徐々に記念館で展示されるようになりました。少したったこともあり、昭和五九年、暁斎の描写力を知っていたために『暁斎下絵』という本にまとめ記念館から出版されました。この本がたまたま来日した大英博物館の日本部長のスミスさんの目に留まり、一九九三年十二月〜九四年二月の三ヶ月間「河鍋暁斎の芸術」展が英国(ロンドン)大英博物館で開催の運びとなったのです。欧米各国から訪れた研究者は初めて見る下絵に驚き、その重要性を語ってくれ、私もお役に立てたことを嬉しく思いました。

●料紙研究

私の修復は、暁斎が描いたそのままを復元するように心懸けています。推考の線や痕跡を見逃さないよう、どんな小さな断片も疎かに出来ません。大英博物館日本課長のクラーク

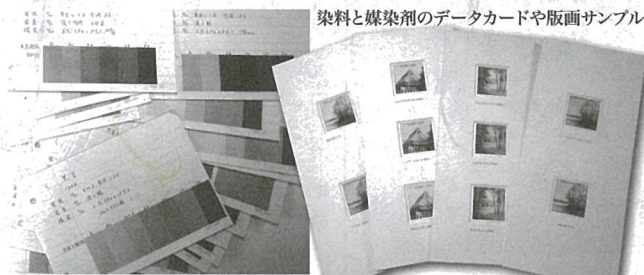
氏はじめ、研究者の方々はこの点を高く評価して下さいますが、修復を続けていみると、時にはその反動で思い切り自由な制作をしたくなりました。

墨色を中心とする暁斎の世界とは別に、学生の頃から興味を持っていた「源氏物語絵巻」や「西本願寺三十六人家集」などを生み出した平安期の料紙へと関心が高まりました。平安時代に存在したと思われる素材と技法にこだわり、当時の色調の再現を試みました。具体的には歴史を遡り、奈良時代の正倉院文書の写経料紙に関する記述は大いに参考になりました。更に書写しやすい紙にするために行われた熟紙加工の一種、打紙も同時に取り入れて進めました。天然の顔料や染料は非常に手間暇のかかるものであることもわかりましたが、手漉き和紙と非常に相性よく発色することを感じながら、多くの染紙見本を作り、授業に活用することが出来ました。料紙の他に百人一首、扇、屏風、本の装画や装丁、壁画などの作品も制作しました。

●和紙教育

女子美での和紙の講座を十年ほど続けました。大学では絵画の基底材、紙・絵具・糊や膠などを研究する講座があります。私は

染料と媒染剤のデータカードや版画サンプル



「浪漫きんからの世界」西洋の革から日本の紙へ開催

二〇二二年、十一月十七日〜三十日、京都で初めての金唐紙の展覧会が東急ホテル内の「ギャラリイ風花」で開催された。

西歐の革から日本の紙へ
浪漫きんからの世界

2022年
11月17日(木)〜30日(水) (全期間)
11月17日(木)〜20日(日) (初日)
京都 東急ホテル 4F ギャラリイ風花
主催 金唐紙研究会

京都で初めての展覧会

生上も好ましい壁紙とされ、明治三十一年頃から輸出工芸品としての黄金時代を迎える。日本国内においても金唐紙は、鹿鳴館や明治・大正の洋館建築に重要な要素として使われた。旧岩崎邸、箱根離宮、国会議事堂などを華やかに飾った金唐紙の製造も、機械製による壁紙が作られ粗悪品が出回り、新技術の登場や需要の減少によって徐々に衰退していき、昭和三十七年に最後の製造所が閉鎖された。

●金唐紙の歴史
なめし革に特殊な金属箔を貼った後、凹凸のある模様を彫った金型でエンボス加工をし、彩色を施した「金唐紙」と呼ばれる革工芸がある。イタリアルネッサンス期からロココ期くらいまでの間、ヨーロッパの宮殿や教会の壁や天井を飾り、一世を風靡した。日本に伝来したのは、『徳川実記』によると一六六二年と記録されている。江戸中期の発明家、かの平賀源内も和紙を用いて模造革を試みたが、あえなく失敗。革から和紙に素材転換され、改良された色彩豊かな模造革は、国内の勸業博覧会やロンドンやウィーンの万博に出品され好評を博す。明治十二年(一八七九)、大蔵省印刷局は紙幣製造で出た損紙を漉き返した再生紙で、輸出用の壁紙の製造を開始。明治二十三年(一八九〇)、印刷局は壁紙製造業を廃止し、その製造を民間に払い下げた。



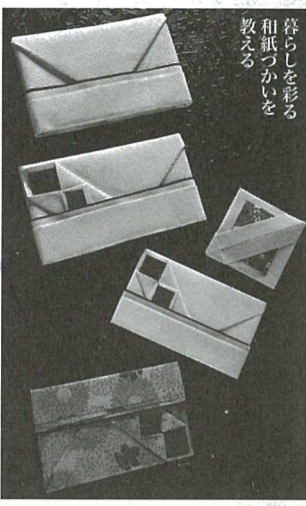
モチーフは花、鳥、昆虫、動物、人物など

●復元と技法

一度途絶えてしまった金唐紙を復元にする事になった上田尚さんは、コロタイプ印刷の老舗、京都の「便利堂」の出身だ。五十才の頃、旧日本郵船小樽支店の壁紙修復の仕事を持ちかけられた。和紙研究家の増田勝彦氏と協力して試行錯誤を重ね、二年間後の一九八五年に復元に成功した。上田さんはもはや革の模造品ではないという意味を込め「金唐紙」と名付けた。

材料の手漉き和紙は日本全国の産地を回り、最終的に越前の紙となった。二年間改良を重ね、

紙、特に料紙や折形などの用途を中心に紙の文化史の講義を受け持ちました。江戸末に文溪堂では、礼法の元になった伊勢貞丈の『貞丈雜記』を出版しました。その中で礼法や折形に触れていますので、関心を持ち折形の研究を始めました。明治末には女学校の教科に組み込まれて、包みと結びが常識として教えられていたことから、私の授業の二部に取り入れてみました。同じ品物を包むにも用途・目的により折形も紙質も「真・行・草」があるのです。真はフォーマル、草はカジュアル行はその中間といったところですが、学生達に受け入れられるか心配でした。意外にもこの百年前の折り目正しくも趣のある習慣を新鮮に感じたようでした。ラッピングやパッケージに活用してはどうかと持ちかけたところ、生活の中を活かして使い出す者や、もつこの話を続けると詰め寄られることもあり、教師冥利に尽きました。



停らしを彩る和紙づかいを教える

幕末から明治にかけてのジャポニズムの波に乗って多くの千代紙に代表される小間紙類をパリ装飾美術館ではコレクションしています。その中には、日本に一枚も残っていない折熨斗(おりのし)シートが十枚もありました。これはヨーロッパの人々が熨斗の意味や使い方がわからず、そのまま残されたのでしょう。記念館には暁斎が描いた熨斗の校合摺(きょうごうず)



日本を代表する漉き手の紙を全紙で標本している

料紙作品を使って本の装幀

うずり)が残されていました。これを見た学生は色差しをして折熨斗を作ってみたくと挑戦しました。自分達で作った熨斗を折ってみてなぜこのように美しい風習が廃れてしまったのかと残念がっていました。

最近和紙も洋紙もわからない人が多くなり、紙質の違った紙を並べて売っている店も次第に姿を消しつつあります。私は小津和紙舗のご協力を得て講座の一コマで紙を買う実習を試みています。分からないことは店員さんに教えていただき、触れながらの紙選別に感激する人が多いことに気がきました。今まで紙に出会うチャンスがなかったのでしょうか。日本の文化は紙と密接に関わってきたのですが、最近ではプラスチックに代表される物質に、合理的という理由で次々に消えていくことが残念でなりません。こんな時代だからこそ学生には本物の紙を与え、使わせています。和紙の良さが分かる人間になれといっているのです。本物が訴える品格を見分けられる眼を育てたいですね。



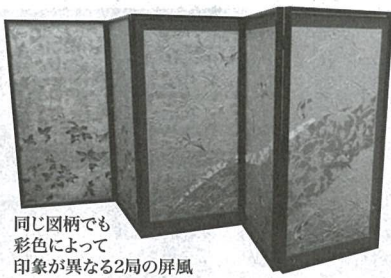
金唐紙を復元した上田尚さん

楮紙と三極紙を合紙したものを、漉き場に特注した。厚さ〇・七〜一ミリのものを使用するが、少しでもドーサが入ってはいけないようだ。

最も難しかったのはロール状の版木だ。革と違い、金唐紙の最大の利点は大きな壁紙を継ぎ目なく作ることができることだ。それを可能にしているのがこの特別な版木で、紙の博物館に収蔵されていた百三十本の古い版木棒を頼りに研究した。材料のサクラ材は樹皮が付いたまま、十〜二十年間自然乾燥したものでないと、中心に割れが入ってしまう。固いサクラの木に細かい模様を精巧に彫らなくてはいけない。深彫り、中彫り、浅彫りと欄間職人に説明を重ね、頼んでみた。一本の版木棒を彫るのに三〜六ヶ月もかかり、製造に三〜四百万円ほどかかるので、かなり長い紙を摺らないとペイできないという。版木は高価なので、紙の博物館にあるものを使わせてもらうこともあるが、新しく作ったものも七〜八本ある。金唐紙の耐久性は、重要文化財の最低耐用年数に合わせて百年に設定している。壁紙の幅は和室仕様の九センチと洋室仕様の七十センチと二種類。



サクラ材のロール状の版木



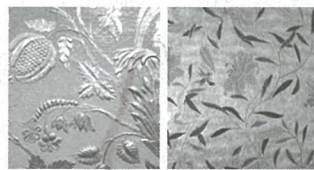
同じ図柄でも色によって異なる2局の屏風

「刷毛」とあったので、最初は様々な刷毛を試

したが紙粉が絡まり、うまくいかない。ある時昔やったことがあるというおぼあさんに聞くと、ブラシの方がいいという。百本くらいのブラシを試し、最終的に回復力があり固い中国産の黒豚の毛の大小のブラシを使用。紙を乾かし、裏打ちして、ワニスで金色を施し、漆で彩色し仕上げる。

●金唐紙友の会

全国の古い重要文化財の建物の修復は、三年に一回くらい国から助成が出る。上田さんは一九八五年「金唐紙研究所」を立ち上げ、旧岩崎邸、入船山記念館（旧長官官舎）、旧林家住宅（長野県岡谷市）、移情閣（神戸市、現在は孫文記念館）、旧池田邸（秋田県大仙市）、東京芸術劇場など、現在までに六ヶ所の修復を手掛けた。修復の仕事の合間に少しずつ見本シートを蓄積し、今回のような実物約六十点を紹介する展示会を開催することができた。金唐紙は、高価な上、余り知られていないために、用途開発に課題が残ると上田さんは言う。使い道がなくてはこの貴重な技術も時の波に埋もれてしまう。技法の継承には海外の博物館の方が熱心なくらいだ。平成二〇年に、「金唐紙友の会」が発足した。会では年四回のワークショップや講演会、金唐紙のある建物探訪旅行などを行っている。事務局は後継者のひとり東京芸大日本画科出身の池田和広さんが担っている。



外資系ホテルのスイートルームの屏に採用

今回の展示会には延べ千二百人が訪れ、和紙があつてこそできた、花や鳥、動物等に美しく彩られた絢爛豪華なシートに見入っていた。

漉き場探訪

■有限会社 山喜製紙所

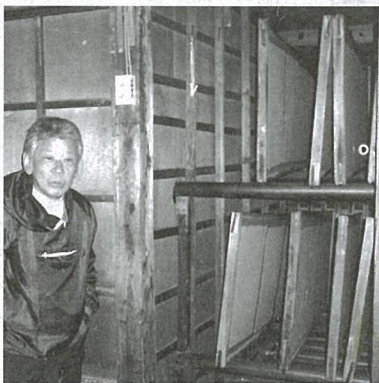
「生き残るには材料調達が大事」

山喜製紙所の創業は明治五年（一八七二年）、今から約四十年前のことだ。といっても、この辺りのご多分にもれず、製紙所名を名乗る前から主に越前奉書紙を漉いていたそう。屋号の「山喜」は初代の山口喜太郎の名から取った。紙は全て手漉き。現在の社長、山口良喜さんは五代目になる。従業員は、息子さんの任俊（ひでとし）さん、勲さん、伝統工芸士の母年子さん、奥様の美代子さん、など山口家の人々と合わせ、十三名。

●雁皮紙

襖紙以外は何でもやっているという山喜製紙所だが、雁皮紙を製造しているのが珍しい。楮と違い、材料の雁皮は生育が遅く栽培が難しいため、天然物を山から採取する。越前でも雁皮紙を製造しているところは、数軒。ほぼ年間を通して刈り取り可能で、石川県内の契約農家が採取したものを、鬼皮まで取ってもらい、二〜三十貫たまと軽トラックで取りに行く。

社長の山口良喜さん。乾燥は全て板干し



高価な原料だ。繊維は楮の三分の一程度と短く、粘性がある。紙肌は滑らかで光沢

行政からの依頼による江戸の古地図



がある。織物にたとえるなら最高級の絹にあたり、その美しさと風格から「紙の王」と評されてきた。平安時代には、料紙、写経用紙などの細字用として使われ、薄くて半透明、少しシャリシャリする感触で、越前産が最上とされた。十七世紀、オランダを代表する画家、レンブラントが版画に使用した和紙は、厚用、薄様の雁皮紙、鳥の子紙ではないかと言われており、細部の表現や黒のグラデーシヨンの再現性に優れた点が愛されたらしい。ここで漉いている雁皮紙の主な用途は金箔の箔打ち紙と文化財修復用。

「箔打ち紙は仏壇に張る金箔を薄く延ばすためのものですが、紙に少しでもデコボコがあつてはいけません。昔と違って現在は仏壇も小さくなり、金箔の需要も減つたので箔打ち紙の需要も減っています。外国産の原料もあつて小さな穴が開きやすい。うちの雁皮紙には滑らかで仇光りがないように、特殊な泥を少し入れていますが、これは企業秘密です。」

●版画用紙

雁皮紙の他にも、水墨画、日本画、デッサン用紙、酒ラベル、卒業証書などを製造している。客の注文に応じて、紙料の割合、厚さ、ドーサ引きの強弱、紙の色など、きめ細かく対応することが出来る。中でも永年定評のあるのが版画用紙だ。



クリフトン・カーフの作品

アメリカの美術学校で学び、一九五五年、宣教師として来日、以降京都や金沢に住んだ版画家クリフトン・カーフのお気に入りの紙は、「ここ」「山喜」の紙だった。カーフ

は日本、米國を始め、世界各國で度々木版画展覧會を開催。多くの企業や雑誌社の依頼で版画を制作し、日本版画協會京都支部長も務めた。

二十年以上もカーフと親交のあった山口さんは、「よく、ここへふらつと来て、一緒に飲んでいました。当時、版画協會では五本の指に入る有名な人でしたが、いつも作務衣を着て、気さくな人でした。カーフを日本風に『圭風』と書いて作品のサインにしていましたね。晩年は、京都から金沢市の主計町に移り住み、二〇〇七年に亡くなりましたが、今そこは彼の作品をコレクションしているギャラリーになっています。作品は、木版の多色摺りで、岩絵具を使うのでとても発色がよく、遊び心のある絵や空気感のある絵などが印象に残っています。版画用紙は厚さや食い込み、ドーサに、作家それぞれの個性的な好みがあるので、それを熟知していないといけません。」



任俊さん、勲さん兄弟

青みを入れるなどすると深みのあるいい赤に染色できます。うちの息子はそれがうまいのです。」と山口さんは眼を細めた。

「和紙は日本の文化ですし、仕事はなくなることはないと思うが、これから生き残っていくうと思つたら、紙原料や道具の調達が大事です。」

●生き残りを左右する材料
国内産の良質な原料は契約農家に栽培してもらつて、購入する漉き場も多い。高齢化で栽培をやめる農家も多く、それに加えこの度の震災による影響も不安定要素だ。紙を漉く道具の桁や簾、簾を編む糸なども職人後継者不足が甚だしい。紙漉きに必須の美しい水も酸性雨の影響が心配だ。ドーサ引きに使う和膠も、製造していた業者さんが最近廃業したという。新しい製造元もやつと見つかった。しかし、二人の息子さんも家業を継ぎ、ユニットとして活動しようかなどと頼もしい。紙の染色センスなどは感心するのだという。

情報欄

●イベント情報

■平成24年越前和紙祈願祭・漉き初め式・賀詞交歓会
時：平成24年1月5日(木)午前9:30～
場所：卯立の工芸館、パピルス館2F(越前市新在家町)

■越前和紙展一和紙を気軽につかおうー
時：平成24年1月19日(木)～2月12日(日)
場所：ふくい工芸會(福井市)
展示、即売あり

■東京えちぜん物語 展示・展示商談会
(TOKYO INTERNATIONAL Gift Show)
時：平成24年2月8日(水)～2月10日(金)
場所：東京ビックサイト

■伝統的工芸品展 WAZA2012
時：平成24年2月23日(木)～2月28日(火)
場所：東武百貨店池袋店 8階催事場
展示、即売あり

■県主催産地体験事業
時：平成24年3月24日(土)～3月26日(月)
場所：(有)やなせ和紙、卯立の工芸館、墨流し工房
大判/小判紙漉き、墨流し体験他

●2010年10月1日、越前和紙の里「パピルス館・和紙処えちぜん」リニューアルオープン!

1981年に開館以来、紙すき体験館として多くの人々に親しまれてきたパピルス館が、新しく生まれ変わりました。広くゆったりとした館内では、今まで以上に、紙すきや和紙クラフトをお楽しみいただくことができます。ショップ和紙処えちぜんでは、職人の個性が光る和紙製品を始め、見て、触れて、素材感を確かめながら、手作り和紙ライフを応援する様々な紙に出会えます。又、体験ルームでは楽しい和紙の手作りが楽しめます。お問い合わせは、パピルス館まで。
tel:0778-42-1363
fax:0778-42-2425



編集後記

ユニクロのCMはスタイリッシュでうまいなあと何気なく見ていたら、何とヒートテックの宣伝に岩野平三郎製紙所の娘さんが出ていた。横山大観や平山郁夫など、昔から名だたる日本画家が愛用した大判の和紙が漉けることで有名な当製紙所の冷たい冬の寒漉ぎの様子を切り取ったものだ。他にも造船工編、料理人編、天文台芸員編などがあり、好評だそう。だ。(よ)

季刊・和紙だより 第33号(2012年冬号) 発行日:2012年1月6日 和紙だよりURL→http://washidayori.jimdo.com/
発行人:福井県和紙工業協同組合 山田益弘 〒915-0234 福井県越前市大滝町11-11 TEL: 0778-43-0875 FAX: 0778-43-1142
編集所:Office YOMOSA 〒606-8225 京都市左京区田中門前町90 TEL: 075-712-8834 FAX: 075-702-6223 E-mail: m-yomosa@smail.plala.or.jp
編集人:右衛門佐美佐子・田中裕子 ※無断での転写・転載はお断りします。